

関西支部第9回夏季大学の報告

今回の夏季大学の全体テーマは“新しい天気予報”であり、自然現象の観測から天気予報、更にその予報が一般社会にどういう形で情報として流され、利用されるかの全体を理解していただくことを目的としました。

7月28日から3日間、近畿各府県（大阪、京都、兵庫、奈良、滋賀、和歌山）教育委員会、大阪市教育委員会、大阪管区気象台の後援を得て大阪府立労働センター視聴覚教室で開催されました。定員108席の会場が連日狭苦しく感じるほどの盛況で、好評のうちに無事終了しました。

開講にあたり、廣田支部長は“日本気象学会は学会の中でも大きな学会ではありますが、会員の方々も種々多彩で、堅苦しい学会ではありません”と入会の案内を含めた挨拶をしました。

講義のトップ・バッターは廣田支部長が立ち、難しい格調高い予報理論を易しく、文学的に話され、すばらしいすべり出でした。以下講義題目と見出しから内容を御推察願います。

第1日目

○天気の科学

廣田 勇（京都大学理学部教授）

さまざまな天気、予測の原理、天気予報の歴史、予測の限界。

○映画

『気象衛星から見る四季の天気』

『京都大学超高層観測レーダー（Mu レーダー）』

○最近の気象観測

沢本弘志（大阪管区気象台調査課長）

観測とは何か、気象庁の行う観測と気象観測、天気予報のための観測、最近の気象観測。

第2日目

○最近の天気予報

正木 明（大阪管区気象台主任予報官）

気象学と天気予報の歴史、日本の天気予報業務、数値予報、降水確率予報、短時間予報、台風の子報と新表示、これからの天気予報。

○実習 地上天気図の描き方・天気図の見方

梅原康男（大阪管区気象台予報官）

○実習 高層天気図（700 mb）

山本二郎（大阪管区気象台予報官）

第3日目

○情報社会と気象情報

富和栄吉（日本気象協会解説予報部長）

気象情報システムの進展、気象情報の現状、防災と気象情報、地域気象の情報化の課題、気象情報の利用例、気象情報の将来。

3日目の午後に予定されていた管区気象台の見学は台風第7号の南海上接近のため中止されました。受講生のほとんどがこの見学を期待しておられた様子で、緊迫した現場こそ、なおさら見たかったようでした。しかし、台風臨時編成の作業内容、台風の状況と若干の予想を解説し中止せざるを得ない事情を理解していただきました。

一般になじみ易い“天気予報”のテーマであったため受講生の申し込みは順調で、会場の都合で94名（定員100）で締め切りました。その内訳は、小・中・高校の教職員の方が全体の51%を占め、学生19%、まったく職業と無関係の一般の方が30%でした。

開講にあたって、各府県教育委員会の後援や報道機関の広報等の御協力に深く感謝致します。また身内ながらテキスト作成から会場の運営に至るまで終始お世話いただいた管区調査課、予報課の若い力に合せて感謝致します。